

デビット・ゾペティ『いちげんさん』の「僕」

— 遊牧民的留学生と海亀的留学生 —

膽 吹 覚

要旨

『いちげんさん』の「僕」と『彗星物語』のボラージュは、その留学目的と卒業後の進路において、前者は〈遊牧民的留学生〉として、後者は〈海亀的留学生〉として対照的に描かれている。その背景を探ると、〈遊牧民的留学生〉には作者ゾペティ自身が投影されていることが考えられ、一方の〈海亀的留学生〉には日本人作家が描く外国人留学生像のひとつの典型を看取することができるようである。このように「僕」とボラージュは、対照的なイメージで描かれているにもかかわらず、両者はともに、身近な動物とのコミュニケーションによって、留学にともなって生じたカルチャー・ショックを解消・克服しようとしている姿が描かれていた。そこに、〈遊牧民的留学生〉〈海亀的留学生〉の区別を超えて、両者の根底に、対人コミュニケーションでは支えきれない苦悩や孤独感を抱えた外国人留学生像を看取することができるようである。

キーワード：現代日本文学，外国人留学生像，『いちげんさん』，『彗星物語』

1. 研究の目的

かつて私は現代の日本人作家が描く日本で学ぶ外国人留学生像について、韻文¹⁾・散文²⁾の両面から考察した。そこで、本稿では、視点を変えて、外国人作家、デビット・ゾペティが描く日本で学ぶ外国人留学生像について考究してみたい。

1990年代以降の日本現代文学では、アメリカ人でありながら、日本語で小説を書き続けるリービ秀雄をはじめ、英語と日本語で書く水村美苗など、いわゆるドゥルーズ的なマイナー文学が注目を集めている³⁾。ゾペティも、また、そうしたマイナー文学に属する作家である。ゾペティは、スイス人であるが、彼は日本語で小説や紀行文を発表している。本稿では、ゾペティの処女作、『いちげんさん』を取り上げて、その中に描かれた外国人留学生像について考察してみたい。

2. 『いちげんさん』の「僕」

『いちげんさん』は、日本の古都、京都を舞台に展開する、ヨーロッパから来た外国人留学生と盲目の日本人女性との恋愛を描いた中編小説である。この小説は第20回すばる文学賞受賞作品。初出は『すばる』1996年11月号。『いちげんさん』は翌97年1月に集英社より単行本として出版、同年秋には同名のタイトルで映画化されるなど、当時、大きな話題を呼んだこともあり、周知の人もいるであろうが、まずは、そのあらすじを記しておく。

この小説の主人公は「僕」である。「僕」は、京都の或る大学の文学部で日本文学を専攻する留

学生である。

1989年1月末、当時3年生であった「僕」は、大学の留学生ラウンジで、盲目の女性、中村京子とその母親に出会う。中村母子は、京子に対面朗読をしてくれる留学生を探すためにラウンジを訪れたのであった。京子に興味を抱いた「僕」は、その1週間後の土曜日に、京子宅を訪れ、対面朗読をすることを申し出る。その後、「僕」は週に1、2回のペースで京子宅での対面朗読を行なう。春休みに入ったころには、2人は朗読だけではなく、軽いデートを重ねるようになり、「僕」が4年生になった年の9月に2人は結ばれ、その関係はさらに深まっていく。しかし、その年の11月9日、「僕」はテレビに映し出されたベルリンの壁崩壊のニュースを見て、自分が外の世界からかけ離れた世界に長く閉じ籠っていることに大きな衝撃を受ける。そして、その年の暮には、かつてのパリの知人の紹介で、フランス国营テレビが製作するドキュメンタリー映画の通訳として、その撮影に同行し、大阪のヤクザの世界を知り、京都という街への失望感を更に深める。正月を京子宅で過ごした「僕」は、卒業論文執筆という「知的マスターベーション」に疑念を抱きつつも、どうにか論文を仕上げる。しかし、その口頭試問では教師から酷評を受け、「僕」は虚無感に襲われる。そして、試験終了後、まっすぐに京子宅に行き、そこで対面朗読をし、その朗読中に「僕」は、京都を脱出することを決心する。卒業式の前夜、京子から東京でOLとして就職することが内定したと聞かされた「僕」は、京子を励ます。「僕」は何の感動もない卒業式を終え、京都を出ることを再確認する。そして、京子が東京に向かう前夜、円山公園で、「僕」はこの街を出て、かつてのような遊牧的な生活に戻りたいことを京子に告げる。京子はそれを受け入れ、2人はそれぞれの未来に向けて公園を後にする。

この小説は対面朗読という行為を通じて展開する恋愛小説であるから、小説中には朗読に使われるタイトルがしばしば登場する。こうした小説中のタイトルの使用は、小説の技巧から見れば、間テクスト性が多用された作品といえるだろう。その一例を挙げれば、「僕」が京子との対面朗読に臨んで、最初に読んだ作品は、森鷗外の『舞姫』である。ドイツを舞台に日本人留学生とドイツ人女性との恋愛、そして、やがて訪れる離別を描いたこの小説を、最初の対面朗読のテキストとして登場させることで、『いちげんさん』の読者に、「僕」と京子の恋の行く末を暗示することに成功している。また、「僕」が京子との最後の対面朗読で読んだ安部公房の『砂の女』は、穴の底からの脱出を切望する主人公の男と、京都から脱出しようと逡巡する「僕」とが、そのイメージにおいて重なり合う効果をもたらしているといえよう。また、この小説を文体・レトリックの観点から見れば、沼野充義が指摘しているとおおり、「多分に英語の影響を受けた文体で見事に換骨奪胎した印象さえ受ける。(中略)レトリック的技法の多くは村上春樹にもよく見られるもの」⁴⁾である。

3. 「僕」と「ボラージュ」

ゾペティは1962年にスイスのジュネーブに生まれた。彼はその後、ジュネーブ大学日本語学科を中退。日本に渡り、同志社大学文学国文学科を卒業し、テレビ朝日に就職する。ゾペティは、

日本での留学経験について、その『旅日記』に次のように記している。

留学生活について書くのは、正直いって、やや面倒くさい。

それについては、『いちげんさん』という僕の処女作を読んでもいただければ、当時の雰囲気
が充分伝わってくるはずだ。京子という盲目の女性との恋愛物語はもちろん純粋な虚構だが、
あとの部分は自分の日常生活から素材を得て書いたもので、大体のことは分かっていただけ
と思う。

この本の主人公同様、僕は京都特有の空気がだんだんと嫌になり、大学を卒業すると、日
本を離れる決心をした。ところが翌年の春、——いくつかの偶然と幸運が重なり合って——東
京に本社を置くあるテレビ局に就職することになった。

この記事に拠ると、『いちげんさん』は、ゾペティの日本留学体験が多分に反映された作品であ
るといってよいであろう。したがって、主人公の「僕」にも、多分にゾペティ自身が投影されて
いると見てよいであろう。かつて私が考察した宮本輝『彗星物語』も、また、留学生のホストフ
ァミリーを引き受けた宮本の実体験に基づいて創作された小説である。そこで、ともに作者の留
学生をめぐる実体験に基づいて搜索された作品、『いちげんさん』の主人公「僕」と、宮本輝『彗
星物語』の主人公、ポラーニ・ボラージュとを比較することで、「僕」の留学生像を探してみたい。

【表1】は「僕」とボラージュを比較したものである。この表にあるとおり、「僕」とボラー
ジュはともに、1985-86年に、ヨーロッパから日本の関西地方の大学に留学し、そこで人文科学（日
本文学・日本史）を学んだ私費外国人留学生である。

このように共通点が指摘できる2人であるが、両者は、その留学目的と卒業後の進路において、
大きな相違を見せている。まず、『彗星物語』のボラージュは、その留学目的を次のように述べて
いる。

「ぼくたちは、いつ自由になれるんだろう。ぼくたちの国は、いつ本当のハンガリーという
国に戻れるんだろう。百年先かな。二百年先かな。」

（中略）

「ぼくは何のために日本に来たのかわからなくなったよ。ぼくは、ハンガリーでの安定した
自分の生活のために、日本の近代史を学ぼうと思ったんじゃない。ねエ、恭太、江戸幕府の
崩壊と明治新政府の樹立は、世界でも類例のない革命だった。薩摩や長州のいなか侍は、い
ったい何をやったんだろう。どうして彼等に、あの鉄壁の江戸幕府を倒すことが出来たんだ
ろう。日本は、日露戦争でもロシアに勝った。第二次世界大戦で負けたのに、いまはこんな
に栄えている。ミラクルな国だ。ハンガリーとは大きな違いだよ。その違いはどこにある？
努力？運？国民性？ぼくにはわからなくなってきたよ。」

ボラージュは、帰国後、母校の大学で日本語と日本近代史を教授する講師に就く。それはボラ
ージュにとって、日本で学んだ知識を祖国のために役立てる行為そのものであった。ボラージュ

【表1】「僕」とボラージュの比較

	「僕」	ボラージュ
国籍	不明（ヨーロッパ）	ハンガリー人民共和国
性別・年齢	男性・20歳代	男性・25歳
留学生の種類 (身分)	不明（私費外国人留学生であろう）	私費外国人留学生（学費は城田家が全額負担）
留学期間	1986年3月～1990年3月	1985年春～1988年3月
大学・専攻	京都の某大学文学部国文学専攻	神戸にある大学の大学院で日本史学を専攻
留学目的	なんとなく一遊牧民的に日本に流れてきた。	祖国の未来のために、日本の近現代史を研究しに来た。
卒業・修士論文	日本近代小説の研究（志賀直哉『暗夜行路』か）	江戸幕府崩壊と明治維新
卒業・修士論文の評価	題目の誤字を指摘されたり、脚注を無視した批判を受けたりするなど、審査は辛辣で厳しく、その評価は極めて低かった。	極めて緻密な研究と論法によって構成された斬新な日本近代史観であると、高く評価される。
学業の様子	二日酔いのままで登校したり、時どき授業を欠席したりするなど、けっして勤勉とはいえないが、レポートやゼミ発表などは真面目に取り組んでおり、普通の学生程度の学習態度である。	成績優秀。大学での勉強はもとより、下宿でも深夜遅くまで学習する。極めて勤勉な学生である。
宿舎	京都市東山区の家賃25,000の古いアパート。6畳1間。トイレ・台所共用。	最初の2年間は伊丹市の城田家の2階にホームステイする。3年目は大学の留学生寮に入る。
奨学金	なし	3年目に毎月17万円受給
アルバイト	大阪の英会話教室	なし
趣味	古書を買うこと	不明
ペット	ウサギ（スティビー）	ビーグル犬（フック）
恋愛	3年生の冬から1年間、盲目の日本人女性、京子と恋愛する。	来日1年半後、ある日本人女性と肉体関係を持つが、その後、別れる。
異文化適応	無条件に京都に受け入れられたいと願うが、そこでさまざまなカルチャー・ショックを受け、京都が「僕」を拒絶していると感じて、ついにそこから脱出する。	日本で受けたカルチャー・ショックをプラスの要因に変えて、よりよく日本文化を理解し、そのことを通じて自らも成長していく。
卒業後進路	未定のまま京都を出る	帰国し、母校の大学講師になる

のように明確な留学目的を持って渡日し、その後、祖国の発展ため、あるいは自らの夢の実現のために帰国する留学生を、中国語の表現を借りて、本稿では〈海亀的留学生〉と名付けてみる。中国では海外へ留学し帰国した者を「海亀」と呼んでいる。海亀は海岸の砂浜で孵化し、その小さな体で大海へと泳ぎ出し、成長して大人になると、生まれた海岸に戻ってくるという習性がある。中国では海外へ留学して帰国した者を元々は「海帰」と呼んでいたが、この「海帰」と「海亀」が同じ発音であることから、海外へ留学し帰国した者を「海亀」とも呼ぶようになったのである。『彗星物語』のボラージュは祖国ハンガリーを出て、日本へ留学し、そこで大きく成長し、再び祖国へと帰っていった。その意味において、彼はまさしく〈海亀的留学生〉といえるであろう。

これに対して、『いちげんさん』の「僕」は、その留学目的を次のように語っている。

そもそも、日本に来た明確な理由というのは自分には特になかった。昔から旅が好きで、二十歳を過ぎてから長い間、いわば遊牧民のような生活を続けていた。五年近くいろいろな所を探して、いろいろな風景の中で暮らし、そして多くの人と出会った。気がついたら、ボヘミアンのように移動を繰り返すことが自分の本性であり、宿命みたいなものになっていた。だから僕は、言ってみれば、なんとなく一遊牧民的に一日本に流れてきただけだった。

明確な留学目的を持たずに「遊牧民的」に渡日した「僕」は、その後、再び「遊牧民のような生活に戻りたい」（『いちげんさん』204 ページ）言って、卒業と同時に京都を脱出する。卒業後の「僕」の進路について、『いちげんさん』は何も記してはいない。このように明確な留学目的を持たずに日本に留学し、卒業後の進路も決まらないままに日本留学を終える留学生を、『いちげんさん』の中の表現を借りて、本稿では〈遊牧民的留学生〉と名付けてみる。

〈遊牧民的留学生〉と〈海亀的留学生〉は、その留学目的と留学後の進路において、対照的な存在と言ってもよいであろう。それでは、外国人作家であるゾペティが〈遊牧民的留学生〉像を描き、日本人作家である宮本が〈海亀的留学生〉像を描いたことに何らかの理由が考えられるであろうか。

まず、「僕」が〈遊牧民的留学生〉として描かれている理由は、「僕」に作者ゾペティが多分に投影されているからと考えてよいであろう。前述のとおり、「僕」のモデルはゾペティ自身であると言ってよい。ゾペティは雑誌『エスクァイア』1997年7月号から1998年12月に、「遊牧民作家の旅日記」（2001年8月に『旅日記』と改題、出版）と題する旅行記を連載している。この連載のタイトルがゾペティ自身による命名であるならば、彼が自らを「遊牧民的作家」と見ていたということになるであろう。また、ゾペティは、彼の生地であるスイスのエルマンス村で過ごした幼少期について、その著『旅日記』に、次のように回想している。

放課後に仲間たちと一緒に釣糸を湖に垂らし、岩魚や鱒を釣った。休日の森に入れば美しい川が流れ、そこに手作りの筏を浮かべたり、浅瀬で石を並べては靴が必ずびしょ濡れになる不安定な橋を作ったり、蛙を捕まえたりして遊んだ。ちなみにこの川はちょうどスイスと

フランスの境目にあり、いわば天然の国境であった。だから遊ぶ時、僕らは一日のうちに一特にそれを意識することもなく一何度も小さな越境者になったわけだ。

スイスの山村で「小さな越境者」として幼少期を過ごしたゾペティが、成人して「遊牧民的作家」となった。こうしたゾペティのキャラクターが『いちげんさん』の「僕」に投影されたと見ることができるであろう。なお、記すまでもないが、このことは、外国人作家が描く日本で学ぶ外国人留学生像が、すべてゾペティが描いたような〈遊牧民的留学生〉像であるということではない。今後、ゾペティ以外の外国人作家が描く日本で学ぶ外国人留学生像の考察を行なううえで、外国人作家が描く日本で学ぶ外国人留学生像に何らかの共通するイメージがあるのかどうか判断したい。

一方、宮本が『彗星物語』に描いたボラージュは、『朝日新聞』掲載の「朝日歌壇」に掲載された外国人留学生を詠んだ短歌（作者は日本人）から導き出された留学生像とほぼ一致するものであった。すなわち、そこには、祖国への誇りと確固たる民族意識を持ち、祖国のため、また自らのために学業に励み、その一方で日本人にとっての異文化理解のきっかけとなるような存在として、外国人留学生は描かれているのである。ゆえに、ボラージュが〈海亀的留学生〉として描かれていることは、宮本個人にその理由を求めるよりも、むしろ、日本人作家に共通する——「朝日歌壇」と『彗星物語』との単純な比較だけで、日本人作家が描く外国人留学生像の傾向を推定することは甚だ強引であることは認めるが——外国人留学生像の傾向と見るのが適当ではないだろうか。

4. カルチャー・ショックと異文化適応

【表1】にあるとおり、「僕」と「ボラージュ」はともに日本留学中にカルチャー・ショックを受けている。

「僕」は、京都で出会う修学旅行の学生からたびたび「外人だ!」「ハロー!」と言われ、「静かな怒りと軽蔑の念を抱かずにはいられな」かったり、あるいは、「僕」が日本語で注文しているにもかかわらず、終始、片言の英語で会話をしようとするトンカツ屋に苛立ったりするなど、京都での留学生活で、さまざまなカルチャー・ショックを受ける。そして、そうしたカルチャー・ショックについて、「僕」は、次のように語っている。

それは決して「差別」とか「閉鎖性」といったありふれた言葉で片づけることのできる単純な問題ではなかった。そこにはもっと薄気味悪い——一見見えそうで、その実、目には見えない——微妙な区別のメカニズムが存在していた。皮膚でメカニズムを感じとることはできても、それは明確な形を持ったものではなかった。それに立ち向かおうとすると、いつも何かにかわされてしまった。その際に音も衝突も痛みもなかったのだが、何度もかわされるうちに、体も心もあざだらけになった。

「そしてもう一つ、もっと抽象的な壁があった。それは自分がこの小さな街で日常生活の中

で何度も何度もぶつかってきた心の壁のようなものだ。僕はこうも思った。京都は壁の街だって。土塀、竹の柵、簾、格子、昔美しいと思っていたこれらのものは、だんだんと僕目のには、この街の人々の心の壁の象徴に見えてきた」

ピーター・アドラーが説く「異文化への移行体験」に従って見るならば⁵⁾、「僕」は京都で受けたさまざまなカルチャー・ショックを、プラスの要因として受け止めることができず、結果的に、異文化適応に失敗し京都から逃げ出していったと解釈できるであろう。

それに対して、『彗星物語』のボラージュをアドラーの説に従って見れば、そこには日本でのさまざまなカルチャー・ショックを避けるのではなく、むしろそれらをプラス要因とし、よりよく日本文化を理解し、適応しようと努力し、それを成し遂げた留学生像が見えてくるのである。すなわち、「僕」とボラージュは、異文化適応においては、対照的な留学生像として描かれているのである。

このように対照的に描かれている「僕」とボラージュであるが、その異文化適応の細部を見ると、奇妙な類似点がある。それは、両者がともに日本留学中に下宿で小動物（ウサギ・ビーグル犬）を飼い、その小動物とのコミュニケーションによって自らの精神的安定を保とうとしていることである。

「僕」は一匹のウサギ、スティビーを連れて渡日し、そのまま4年間、白川近くのアパートにスティビーと同居する。「僕」は「世の中にこれほど献身的な兎の飼い主はどこを探してもきっといないという気がするくらい」にスティビーを大切にした。夏休みに北海道旅行をし、京都に戻った「僕」が、京都という街に魅力を感じられなくなったとき、「僕」はスティビーと、次のようなコミュニケーションをとる。

スティビーはそんなことはどうでもいいという顔で僕を迎えた。夏の暑さがかなり応えたらしく、すこし痩せて見えた。クーラーも扇風機もない他人の部屋に置き去りにされたことに腹を立てているのか、彼はむっとした表情を浮かべているようにも見えた。

スティビーはウサギであるから、もちろん、人間の言葉を話すことはできない。この場面は「僕」がスティビーの表情から「そんなことはどうでもいい」というメッセージを勝手に読み取ったに過ぎない。ここにいう「そんなこと」とは、「僕」の京都に対する失望感であり、それをスティビーが無関心を装って問題視しなかったかのように、「僕」が勝手に解釈しているのである。

一方、ボラージュが下宿した城田家には、年老いたビーグル犬、フックが飼われていた。ハンガリーへ帰国する前、ボラージュはその送別会で、フックへ次のようなスピーチを送っている。

僕の愛する友だちであるフックへ。あなたは、ぼくにとって、いつも心でつながっている優しい友人でした。なぜなら、あなたは人間の言葉を喋ることができなかったからです。しかし、ぼくとあなたは、夜中に、城田家の居間で一緒に横になり、たくさんの会話を交わしました。主に相談事を持ちかけるのは、ぼくのほうでした。ぼくはあなたとの心の対話をよく覚えています。たとえば、ぼくが、日本の梅雨でいらいらしていると、あなたは、ぼくの手

を舐めて『ぼくのほうがもっと辛いで。ぼくには毛があるんや』と語りかけるのです。ぼくがホームシックにかかり、ハンガリーへ帰りたいと言うと、あなたは『ぼくには帰るところなんかないんや。ぼくのお父ちゃんとお母ちゃんが、いまどこでどうしてるのか知らんのや。ぼくのお父ちゃんとお母ちゃんは、城田晋太郎と城田敦子や。ボラージュ、きものそう思たらええやないか』と言ってくれました。

フックもまた、ステイビーと同じく人間の言葉を話すことはできない。ゆえに、ボラージュ自身が語っているとおり、フックとの会話は「心の対話」であった。ボラージュの問いかけに対するフックの返答は、前述の「僕」とステイビーのコミュニケーション同様に、フックの表情やしぐさをボラージュが勝手に解釈したものに過ぎない。「僕」には京子という恋人がいて、また、ボラージュには城田家の人たちがいる。ともにその周囲に相談できる日本人がいるにも関わらず、「僕」はウサギのステイビーと、ボラージュはビーグル犬のフックと、それぞれ動物とのコミュニケーションによって、留学にともなって生じたカルチャーショックを解消・克服しようとしている姿が描かれているのである。そこに、〈遊牧民的留学生〉〈海亀的留学生〉の区別を超えて、両者の根底に、対人コミュニケーションでは支えきれない苦悩や孤独感を抱えた外国人留学生像を看取することができるようである。すなわち、異国（異文化）におけるカルチャー・ショックによって生じる苦悩や孤独感といった負のイメージが、現代日本文学に見る外国人留学生像全体に通じる共通基盤イメージとして存在しているのではないか、ということが考えられるのである。

《注》

- 1) 膽吹覚 (2005) 「現代短歌に見る外国人留学生像」(『城南国文』24・25 合併号、pp. 19-30。
- 2) 膽吹覚 (2005) 「現代日本文学に見る外国人留学生像——宮本輝『彗星物語』のポラーニ・ボラージュ——」(『福井大学教育地域科学部紀要』 I-56 号、pp. 1-19。
- 3) 土田知則・青柳悦子 (2001) 『文学理論のプラクティス』新曜社、pp. 226-259 参照。
- 4) 沼野充義 (1999) 「解説—新しい世界文学に向けての越境」デビット・ゾペティ (1999) 『いちげんさん』集英社文庫、pp. 211-212。
- 5) 八代京子他 (1998) 『異文化トレーニング』三修社、pp. 241-272 参照。

《引用文献》

- デビット・ゾペティ (1997) 『いちげんさん』集英社
デビット・ゾペティ (2001) 『旅日記』集英社
宮本輝 (1995) 『彗星物語』角川文庫

Abstract

The Image of overseas student in *Ichigen-San*

— Nomad-type overseas student and Turtle-type overseas student—

IBUKI Satoru

The name of the hero of *Ichigen-San* is “Boku”. “Boku” is drawn as a Nomad-type overseas student. The name of hero of “Comet story” is Balazs. Balazs is drawn as a Turtle-type overseas student. These two people are drawn as contrasted international student. Nomad-type overseas student comes to Japan without a clear purpose, and the course after it graduates is uncertain. But, Turtle-type overseas student came to Japan a clear purpose having it, and he comes back to the motherland, and works for his country after it graduates. Though they are two contrasted like this people, they try to get over the culture shock with the animal through touch. It can take care of the students from abroad image that holds suffering and the loneliness that cannot be supported there by personal communications.